明治大学
法学部
あ

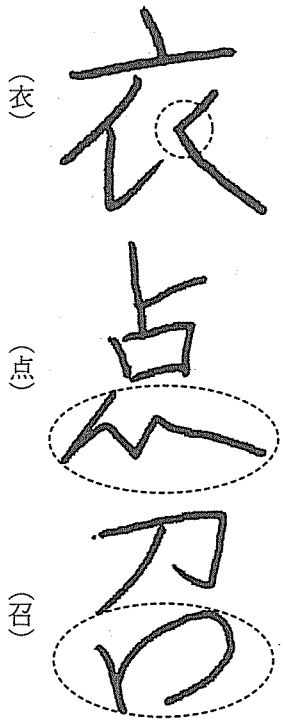
国語問題

はじめに、これを読みなさい。

1. この問題冊子は十七ページある。ただし、**ページ番号のない白紙は、ページ数に含まない。**
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
3. 監督者の指示に従い、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマーク、もしくは記入すること。所定欄以外のところには、何も記入しないこと。
5. マーク式問題の解答はすべて一つなので、二つ以上マークしないこと。
6. **字数が指定された問題では、句読点などの記号も字数に含む。**
7. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル（いずれもＨＢ・黒）で記入すること。
8. 解答は楷書で正しく記すこと。薄い文字や小さな文字、点画をつなげた文字など、**あいまいな文字は不正解とする。**
9. 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
10. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
11. **解答用紙はすべて回収する。**持ち帰らず、必ず提出すること。
12. この問題冊子は会場などに放置せず、必ず持ち帰ること。
13. 試験時間は六十分である。
14. マーク記入例

良い例	悪い例		
●	◎	⊗	○

不正解になる文字の例



一

次の文章をよく読んで、設問に対する答えを、解答用紙の該当欄に記入、またはマークしなさい。

社会生活上の規範には、道徳・宗教・法的規範等種々の体系が存するが、原始社会においてはこれ等の規範体系は未だ分化せず、社会生活は道徳ともつかず、法的規範ともつかない一種の習俗によって支配せられて居った。しかしてかかる習俗は祖先祭祀等の原始民族に共通なる宗教的思想に①培われたものであるから、原始社会における人々の生活は宗教的色彩を多分に包②ガンする習俗によって規律せられて居った。宗教、道徳、法的規範等の後世における規範体系は全く此の宗教的色彩に富む習俗の内にそれぞれの萌芽を有し、人類文化の発展につれ次第に分化するに至ったものである。

法と道徳との関係を知るには、先ずその各について知らねばならぬが、ここには道徳の概念について先ず一瞥を与えよう。

道徳とは善を命じ不善を禁止する良心の命令なりと謂うことが出来る。しかし、「善」の意義については古来、快楽説、克己説、自我実現説等種々の説が対立し、倫理学の基礎論は此の一点に集中せられて居るかの観がある。

惟うに善とは吾人が人間の行動に対する価値判断をなすにつき最後の基準となるものであり、此の基準は人類の立場よりすれば、これを人生終局の目的に求むるより外はないのであるから、善とは畢竟人生終局の目的そのもの又はそれに適合することを指称することとなり、人生終局の目的を如何に解するかによって、善の観念に差異を来たすこととなる。自分は人生終局の目的をもって人類共同の繁栄に在りと解し、その人類共同の繁栄とは、全人類各個の我が充実し発展し、その充実発展の総和量が極大に至りたる状況を指すと考うるものである。しかも我の充実発展とは、個人主義的な他我を顧みざる自我の実現とは異なり、出来得る限り他人の我の充実発展を阻害することなく、否寧ろこれを助長しつつ、自らも充実発展することであるから、道徳とは各人の調和的なる我の充実発展に適合することを命じ、しからざることを禁止する良心の命令なのである。

此の概念に従えば、道徳の目的は善の達成、即ち各人の調和的なる我の充実発展、更に換言すれば人格の完成に在ることになる。しかし、各人の我が充実発展するについては、出来得る限り他より妨害せられざる境地に置かれることを必要とする。しかもかかる機会は無限に存在するものではないから、或る一人がかかる機会を獲得する反面において他の一人がこれを喪失

する場合が尠くない。ここにおいて各人の間に右の機会を適当に分配する必要を生ずるのであるが、法はかかる機会を人生の目的に最も適合するがごとくに分配することを目的とするものである。しかして我の充実発展の機会が右のごとくに分配せらるることを正義の実現、秩序の維持と称するのであるから、法は畢竟正義の実現、秩序の維持を目的とするものなのである。

法は上述のごとく[1]我の充実発展の機会を適当に分配することを目的とするものであるが、我の充実発展の機会を分配することは各人の調和的なる我の充実発展の手段なのであるから、法は直接には我の充実発展の機会を適当に分配することを目的とするものであるが、その終局の目的は各人の調和的なる我の充実発展に在る。又道徳は各人の調和的なる我の充実発展を目的とするものではあるが、此の目的にして実現せらるるときは、社会生活における秩序は自ら維持せらるるに至るのである。

右のごとく道徳は善の達成、人格の完成をその目的となし、その目的にして達せらるるときは、社会生活における秩序は、自ら維持せらるるに至るのであるから、総ての人が良心に従い違うところがなければ、道徳のみによっても社会の秩序は相当に維持せられ、道徳の外に法なる規範の存在を必要とすること少なかるべき理であるが、実際は人は常に必ずしも良心の命ずるところに従って行動するものではなく、往々これに背き不徳不義の行動に出づることがあるので、人の行為を自律的なる道徳のみによって律せんとするときは、良心を恐れざる者は他よりの強制なきを[2]奇貨とし、[3]放恣無頼の生活を営み、社会の秩序はこれを維持し得ざるに至るであろう。しかのみならず道徳観は必ずしも一様でなく、一人の善と信ずるところは他人は必ずしもこれを善なりと信ぜず、一人の不善と考うるところは他人は必ずしもこれを不善なりと考えざるものであるから、仮令万人がその良心の命に従うものなりとしても、社会生活における秩序は道徳のみにより維持又は発達せらるるものではない。ここにおいて他律的強制規範たる法の存在を必要とし、国家は或る種類の道徳的行為については、これをなすべきや否やを各人の良心の判断に一任せず、又或る種類の非道徳的行為についても、これをなすべからざるや否やを各人の良心の判断に一任しないのである。これが道徳の外に法の存在を必要とする所以であり、道徳と法との［　X　］するに至った所以である。

しからば国家は如何なる道徳的行為を法をもって命じ、如何なる非道徳的行為を法をもって禁止するかというに、その範囲は各時代、各地方における人の良心の精粗と良心[③]遵奉の程度とによって異なり一様ではないが、要するに、国家がその国家内

の共同生活の秩序を維持及び発達せしむるため、必ず各人をしてなし又はなさざらしむることを必要とする作為又は不作為は、法をもって命じ又は禁止し、しからざる作為又は不作為は、これを道徳に一任するのである。しかして外部的行為に現われない純粋なる心理現象は、如何に非道徳的なものであっても、これがため直接、国家的共同生活における秩序を害せられる惧(おそれ)がないから、国家は法をもってこれに干渉することなく、純然たる道徳上の問題としてこれを良心の判定に委ねて居るのである。以上のごとく論ずるときは、人間の行動中法によって支配せらるる範囲は、道徳によって支配せらるる範囲より小であって、その一部分に過ぎざるがごとくに考えられるが、実はそうではない。蓋し、法の内容は善悪の道徳的観念に関係なく、単に社会生活における秩序の維持及び発達のために必要、利益又は便宜なりや否やの考量のみに関係することがあり、従って法は道徳の支配せざる独特の領域を支配することが尠くないからである。例えば諸種の手続を定めて居る法は道徳の支配しない独特の領域を支配して居るのである。これを要するに、法と道徳とはその支配する人間の行動の範囲を全然異にし又は全然同じゅうするものでなく、又[4]道徳の領域は法の領域より小であって後者の内に包ガンせられてしまうものでないのは勿論であるが、又法の領域は道徳の領域より小であって後者の内に包ガンせられてしまうものでもないのである。

法と道徳との間には以上のごとき差異が存するが、その社会生活上の規範たる点においては両者共に異なるところがない。しかして法は人の良心の練磨とこれが遵奉程度の増進に従い、次第にその支配する範囲を道徳に譲り、自らは縮少すべきものであって、「法なきをもって法の理想となす」ものであるが、実際はこれに反し、法は次第に道徳の領域を侵略して自己の領域を拡大し、その内容はますます詳密となり、「[5]法三章をもって足る」というがごときは過去の夢想と化しつつある。

法と宗教との関係は、法と道徳との関係より、これを説明するのが一層困難である。蓋し宗教の概念を把握することは、道徳の概念を把握することより、一層困難なるが故である。

惟うに、人智人力には限りあり、人は千変万化流転極まりなき万有現象はその一部分すらこれを制御することは勿論、これを窺知することすら困難であり、常に偉大なる自然の力により駆使せられ、又これに対して圧迫を感じて居る。ここにおいて、かかる自然力を統御し得る又は自ら(みずか)に④グ有して居る、人間以上のものでありしかも人間的に相感応する感情及び意思を有する

神の存在を信じ、その偉大なる智、偉大なる能力を崇敬し、これに縋り、自然の迫害を免れ、内心の安定を得んとするのが人の常であり、これが宗教の生まれた所以である。即ち宗教は超人的にしてしかも人格的なる神の存在を肯定し、その偉大なる能力を信仰し、自己の行為及び心持をして神の意思命令に合致せしめ、もってその洪大無辺なる愛護の下に安心立命を得んとするのを目的とするものであり、此の目的到達のため遵守することを要する神の命令が宗教律(又は単に宗教)である。

しかも神は全智全能なる外、万善なるが故に、神の命令はその内容において善を命じ悪を禁止する道徳と相異なるところ尠かるべき理である。唯前者においては各人の外に存する価値判定者たる神を想定するに対し、後者においては各人に内在する良心が善悪の価値判断をなすという差異が存する。宗教も道徳と同じく社会生活における秩序の維持及び発達を直接の目的として居るものではなく、唯その目的に到達せんとする念願が人々を駆って聖なる神の意思命令に合致せしむる結果、社会生活における秩序の維持発達を見るに至るのである。又宗教の目的たる安心立命は、これを道徳の目的たる善の発達と比較するときは、一層内面的である。蓋し、道徳は人と人との関係に重きを置く(法的規範に比較すればその程度は低いが)に対し、宗教は人と神との関係に重きを置くが故である。従って宗教教義の如何によっては甚だしく個人的であり、非社会的であり、社会生活における秩序の維持発達というその間接的効験を多く期待し得られないものが少なくない。

宗教の概念及び宗教と道徳との比較は大体以上の通りであるが、これと法と道徳との異同を彼此照合すれば、法と宗教との関係も亦自ら理解し得られることと信ずる。

(柳川昌勝の文章による)

問1　傍線部①「培」、③「遵」の読みを、それぞれひらがなで記しなさい。

問2　傍線部②「ガン」、④「グ」を、それぞれ漢字で記しなさい。

問3　空欄 X にあてはまる語を本文中から二文字で抜き出し、解答欄に記しなさい。

問4　傍線部1「我の充実発展の機会を適当に分配することを目的とする」とあるが、意識的に機会を分配しなければならない理由の説明としてもっともふさわしいものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　自己の充実発展に必要な機会に、誰もがやすやすとめぐりあえるわけではないから。
2　自己実現にあたって有利な状況は、社会的地位の高い人間に限って作られるものだから。
3　彼我を問わず充実発展に必要な機会を与えることが、法や道徳の生まれた原因だから。
4　自分の利益ばかり追求するよりも他人につくすことこそが、理想的な社会の在り方だから。

問5　傍線部2「奇貨とし」とは、どういうことか。次の選択肢の中からもっともふさわしいものを選び、その番号をマークしなさい。

1　予想外の不幸に出くわしたものの、その災いを転じて福となすこと。
2　思いがけない利益が得られるかもしれない機会として利用すること。
3　不審な出来事に対しても怖いもの見たさで無我夢中で突き進むこと。
4　窮地にあって寄せられた厚意につけこみ、相手を陥れてしまうこと。

問6　傍線部3「放恣無頼の生活」とあるが、これを「 □ を図ること」の形で説明する場合、空欄に入る適当な部分を本文中から十八字で抜き出し、その最初と最後の三文字を、解答欄に記しなさい。

問7　傍線部4「道徳の領域」に属するものを本文中から十九字で抜き出し、その最初と最後の三文字を、解答欄に記しなさい。

問8　傍線部5「法三章」とあるが、この「三」の使われ方にもっとも近いものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　三省　　2　三墨手　　3　三日天下　　4　第三者機関

問9　傍線部6「神を想定する」とあるが、本文中における神の説明としてもっともふさわしいものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　神は超越的な存在であるため、人間性とは無縁であり、感情を露にすることもない。
2　神は自然のありとあらゆるものに宿っており、森羅万象を生み出す力を持っている。
3　神は人間の精神に安寧をもたらすばかりでなく、恐ろしい天罰を与えるときもある。
4　神は偉大な力の持ち主ではあるものの、万人に共通する利益をもたらさない場合もある。

問10　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　法や道徳の目的は人格の完成という点に据えられるのに対し、宗教の目的は天命の下に心の平安を保つことに置かれている。
2　法は国家が強制する他律的規範と考えられるのに対し、道徳や宗教は自身の良心を判断基準に置く自律的規範だと説明出来る。
3　法・道徳・宗教は生活に必要な社会秩序を維持する役割を果たしているが、その有用性は三者が生まれた直接の目的とは別に派生したものである。
4　法・道徳・宗教は社会の在り様と密接な関わりを持っており、それぞれが管轄する範囲は時代・地域の違いによって変化することなどない。

二

次の文章をよく読んで、設問に対する答えを、解答用紙の該当欄に記入、またはマークしなさい。

新聞紙は社会的の感覚機関である。それは人間その他の動物が持っている感覚機関と同じく、全く受動的のもので、社会現象を感覚する機関である。通常新聞紙を、誰でも発表の機関というように心得ているが、この発表は実はある刺激を受けて感覚が働き出す場合と同じ作用なのであって、個人的にでなく集団的に、人間が知覚する一つの形式なのである。個人的に感覚する場合には刺激だけが外的で、個人に惹(ひ)き起こされた作用は内的に働くのであるが、集団的に感覚する場合にも、その感覚は集団の一つの内的作用、即ち心理作用であって、新聞紙はこの社会心理の内的作用の一つの機関である。集団がどう感じ、どう知覚するかをその機関で決定しているのである。つまり、個人の場合に感覚機関があるように、社会に新聞があるのである。

故に新聞紙は、「新聞」という形で社会に発生する前から、何らかの形でそれが存在していなかったことはないのである。[1]印刷機械の出来る前から新聞はあった。社会的な出来事が、集団的に感覚されることが即ち今の新聞と同じなので、そういう感覚のなかったことはないとすれば新聞のなかった時代はない。

感覚の問題として新聞を考えれば、一般に感覚についてあり得ることは、新聞紙においてもあり得るはずである。感覚は最も初歩的なものを除けば、経験とあいまって働くものであって、正しい知覚は即ち経験を基礎とした感覚に外ならない。故に感覚は経験の発達と伴ってはじめてその内容が充実する。従って、感覚も教養が必要である。そこで、教養のあるものの感覚が、一般の感覚を指導する結果となる。音楽家の感覚は、それほど音楽的に発達していない人々の感覚を指導する。工芸、美術に関する天才の感覚は、一般人のその方面の感覚を指導する。そのことは、社会的感覚の場合にもある。集団がどう感覚するかということは、その集団の内の[2]特に経験に富んだ人がまずそれを感覚し、そういう人々の感覚が一般人の感覚を呼び覚ます。新聞紙は感覚機関であるが、一般人の感覚機関よりはもっと敏感に働いて、一般人の感覚を呼び覚ます働きを持つのである。

個人の場合に、生活の発達は全くその感覚の発達に依存するのであるが、社会の場合にもまた同じであって、この感覚が鋭敏に発達することがなければ、社会的進歩は期し得られない。感覚は、畢竟生存の最も根底的な働きである。何事も、まず感覚するところから始まる。感覚がなかったならば、迷信も無ければ、科学も無い。社会的にもまた感覚が進歩の出発点である。現状がどうあるかを知覚することが出来ないでは、社会的生存は不可能である。新聞紙は、この一般の知覚を組み立てる基礎感覚の機関である。もし現代の始皇帝が、世界の新聞紙を禁圧すれば、必ず異なった形で新聞紙が現れる。[3]それが現れなかったら、社会は滅亡する。それはちょうど、目が潰(つぶ)れると皮膚の感覚が鋭敏になり、他の機関が発達してほとんど視覚の代用をし、それが出来ない人間は死んでしまうのと同じである。

新聞紙は感覚機関であるが、感覚はすべての人において正しく働くとは限らない。新聞紙もその鋭敏な働きで一般の感覚を刺激するが、その鋭敏性は必ずしも正しく感覚するとは限らない。個人の感覚が病的に働くように、新聞紙に現れる感覚が病的であり得ることは拒まれない。その場合にも、感覚の病的に傾く事情が新聞紙についても考えられる。例えば、感覚が心理学者のいうとおり、それ自らでは極めて不正確であるという事実はそのまま新聞紙に適用される。時間の感覚などは、時計とか、蠟燭(ろうそく)とか、水とか、何かそういう機械的方法を用いなければ①トウ底正しく感覚されない。色でも、音響でも、距離でもおおよそ感覚機関を必要とする現象は、その自然のままの感覚機関では、正しく感覚することが出来ないのである。況(いわ)んや、もっと複雑ないろいろな刺激が結合した場合には、感覚機関の不正確は驚くべきものである。よく行われる遊戯に、多人数が円く坐って、その中の一人が少し複雑なこと、例えば「兄の嫁の姪(めい)の亭主の弟の嫁の親爺(おやじ)の姉が兄の嫁の姪の亭主の弟の嫁の親爺の姉に……」と隣の人に囁(ささや)き、その人がまたその隣の人へそれを伝えるというふうにして、一回り回ってもとの人の耳にそれが帰って来る時には、まるで違った関係になってしまう。しかも、社会の出来事はそんな関係よりももっともっと複雑であって、中間に入る人々ももっと沢山にいる。そこで、その感覚の不正確なことは思いやられる。アメリカの新聞紙などについて、極めて簡単な出来事を、いろいろの新聞が種々に報道している記事を切り抜いて集めると、みんなが滑稽なほど違ったことを書いていることを指摘している人がしばしばあるが、この間違いは、ある意味で感覚機関に当然のことであって、社会的

感覚機関としての新聞においても、もっと機械的な方法が発見されない限りは、トウ底修正されるわけのものでない。

この感覚の誤りは当然であるが、しかし個人の場合にも、当然の誤りと病的な誤りとがあるように、社会の場合にもそれがある。普通人が、普通の計算を間違う位は病的とは言えない。けれども、「二二んが蠟燭」というようなことを、正しい知覚と信ずるものがあるとすれば、その人は病的であると言える。ところが、そういう病的現象が、往々個人を犯すと同じように社会を犯す。②ヘン執狂的現象は社会にもある。そして、甚だしい錯覚が一般に信じられ、正しい知覚がかえって③排斥される。

4 感覚機関としての新聞紙の記事が、ことごとく不正確であると言っていい位間違いに富んでいるのは、右の点から考えればやむを得ないことである。従ってまた病的錯覚が新聞紙に現れることも往々ある。しかし、人間が感覚する上において、錯覚が脱るべからざることであるとすると、人間はその錯覚に基づいて意識し、行動するわけであって、ある点まで錯覚が働くことが社会的の過程を決定すると言っていい。時によると全くマニヤックの心理が、社会群の行動を支配する。十字軍のごときが、その顕著な例である。もっと病的になれば、ヨーロッパに行われたダンシング注マニヤのように、意味の分からない舞踊が病的に流行する例もある。

社会は「正しいこと」よりは、むしろ右のような錯誤によってある過程をとることは、ちょうど昔迷信が、ある社会群の行動を支配したのと同じである。

故に新聞は、感覚の錯誤を修正する物理学的ないし心理学的機械のような機関ではなく、5肉眼や耳と同じように、錯誤的に感覚する機関である。このことは、6新聞紙に対する理想主義的迷信を持った時代の見解を打ち破る見地である。

新聞紙は決して誤って感覚しようとする目的を持った機関ではないが、また決して物理学的感覚補正機械のように、感覚を補正する機械的方法を持っているものではない。新聞はただ個人が天然の方法で感覚する方法に立脚し、往々それだけを根拠とする。故に、感覚の錯誤は科学的方法で修正されてはいないのである。調査というようなことも、元来感覚的であるから一つ事柄を違った立場のものが調査すると決して一致しない。調査にも段々科学的方法が採用され、統計または分析が社会現象に応用されているが、新聞紙の感覚は時間の関係その他の事情のためにこれらの科学的調査法を、少しも応用することの出来

ないものである。新聞紙の記事は、正しい知覚であるには余りに感覚的である。［　X　］をもって補正する手続をする余裕のないことが、新聞紙の知覚を極めて初歩的な感覚的なものとする。

（長谷川如是閑「社会的感覚機関としての新聞紙」による）

注　ダンシングマニヤ＝脈絡なく突然踊り出し、踊りが感染し、死ぬか踊り疲れるまで踊り続けるという社会現象。

問1　傍線部①「トウ」、②「ヘン」を、それぞれ漢字で記しなさい。

問2　傍線部③「排斥」の読みを、ひらがなで記しなさい。

問3　空欄［　X　］にあてはまる語を本文中から二文字で抜き出し、解答欄に記しなさい。

問4　傍線部1「印刷機械の出来る前から新聞はあった」とあるが、具体的にどのようなものがあったのか。それに該当しないものを、次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　祝詞（のりと）　　2　風説　　3　落首　　4　謡言（わざうた）

問5　傍線部2「特に経験に富んだ人」とほぼ同じ意味内容の部分を、本文中から七文字で抜き出し、解答欄に記しなさい。

問6　傍線部3「それが現れなかったら、社会は滅亡する」とあるが、なぜ新聞紙が現れないと社会が滅亡するのか。その理由を「［　　］から」の形で答える場合、空欄に入る適当な部分を、本文中から二十文字で抜き出し、その最初と最後の三文字を、解答欄に記しなさい。

問7　傍線部4「感覚機関としての新聞紙の記事が、ことごとく不正確であると言っていい位間違いに富んでいる」とあるが、それはなぜなのか。次の選択肢の中からもっともふさわしいものを選び、その番号をマークしなさい。

1　新聞紙は、人々の感覚を刺激する機関であるために、事実よりも多くの人の関心を引く内容が求められているから。
2　新聞紙は、背後に様々な事実が絡んでいる事件を、多くの人々の主観的な証言を通して伝えようとするものだから。
3　新聞紙が社会的感覚機関として機能するためには、異なる感覚を持つ多くの人の考えを反映させる必要があるから。
4　新聞紙の記事は多くの記者の執筆によって構成されていて、それぞれの記者の感覚には誤りが当然生じているから。

問8　傍線部5「肉眼や耳」の本文中における意味とほぼ同じ意味内容の部分を、本文中から十文字で抜き出し、その最初と最後の三文字を、解答欄に記しなさい。

問9　傍線部6「新聞紙に対する理想主義的迷信を持った」とはどういうことなのか。次の選択肢の中からもっともふさわしいものを選び、その番号をマークしなさい。

1　新聞紙に対して社会の感覚の錯誤を修正させようという無理な願望を人々が抱いていること。
2　新聞紙は将来感覚の錯誤のない機関になるという根拠のない説が人々に信じられていること。
3　新聞紙が社会の感覚の錯誤を修正する機関であるという甚だしい錯覚に人々が陥っていること。
4　新聞紙は近い内に社会の感覚の錯誤を修正するようになるという噂が人々に広がっていること。

問10　本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　新聞紙の目的は、人々の感覚を呼び覚まし刺激して、病的な社会現象を正確に認識させた上で、正しい知覚を伝えることにある。

2　新聞紙は、社会の現状を明らかにし発表することによって、人々が今後どのように進むべきかを指導的に示す役割を担っている。

3　新聞紙は社会において不可欠な機関であるが、社会の誤りを修正するには経験ある人の感覚だけでなく科学的方法も必要とする。

4　新聞紙の内容は、感覚に基づいているために誤りを生じやすく、その感覚を補正することも時間の制約などによって困難である。

三

次の文章は、仮名草子『堪忍記』の一段である。よく読んで、設問に対する答えを、解答用紙の該当欄に記入、またはマークしなさい。

宋の周茂才とて、A有徳なる人あり。算漢[注1]に達して、売買を業とし、財をまうくる事、夜に日に多く、大福人の名をほどこしけり。ひそかに斗斛と秤と隼尺とを二様にこしらへ、軽く細きをもつてはかり出し、重く長きをもつてをさめ入るるほどに、利潤はなはだ強し。

その妻張氏は、智恵たけて賢なる人なり。かたち世にすぐれて、心ざし憐れみ深し。しかるに妻はこのありさまを見て、大いに嘆く色あり、その舅姑の前に行きて、「我この家の妻となり、末久しくあるべしとも思はず。もしその内に子を産みたらば、子ともろともに家滅び、科にあはん時、B自らがいたしける業のやうに、人の申さんも心うかるべし。家の滅びは近きにあるべし。只暇を給はりて、帰り侍らん」と言ふ。

周才美[注2]聞きて大いに驚き、恥づかしく思ひ、「汝の言ふ所、まことにC天道のおそれあり。禍の来たらん事は、必ず遠からず。今より後は、この小さく細き斗衡を、Dうち割り捨つべし」といふ。

妻のいはく、「それいまだE自らが思ふ心に足らざる事あり。さてその二様をば、何年ばかり使ひ来たれる」と言ふ。周才美がいはく、「二十余年このかたなり」と。妻のいはく、「自らをこの家にとどめて、君が親たちにF仕うまつらしめんと思ひ給はば、今よりして量り取るべき物は小斗にて取り、人に渡す時は大斗にて量り出し、物を買ふ時は重き秤・短き尺にて取り、売る時は軽き権・長き隼にて渡し、二十余年の間、是をもつて、前のG くらましける科を償ひ給はば、自らこの家にとどまり侍らん」と言ふ。

周才美深く感じて、かくの如くにせしかば、家賑はひ、いよいよ徳つきて、二人の子をまうけ、学問させしかば、いくほどなく禁中に召されて、学士の官にのぼり、家栄えけり。

注1　算漢……算術と学問。
注2　周才美……周茂才の別称。

問1　傍線部A「有徳」の意味としてもっともふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　恰幅がよいこと
2　物惜しみすること
3　富裕であること
4　信心深いこと

問2　傍線部B「自らがいたしける業」とは、どのような意味か。次の選択肢の中からもっともふさわしいものを選び、その番号をマークしなさい。

1　あなたが犯した悪業
2　自然とそうなってしまった状態
3　私が行ったこと
4　強固な意志をもって行った善行

問3　傍線部C「天道のおそれ」とは、どのようなものか。次の選択肢の中からもっともふさわしいものを選び、その番号をマークしなさい。

1　道徳において恥ずべきところ
2　神仏に対する信仰心
3　自然の摂理に従った行い
4　太陽の下ではできない悪事

問4　傍線部D「うち割り捨つべし」の訳としてもっともふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　打ち砕いて捨てることができる
2　打ち砕いて捨てることにしよう
3　打ち砕いて捨てなさい
4　打ち砕いて捨てた方がよい

問5　傍線部E「自らが思ふ心に足らざる事あり」とは、どのような意味か。次の選択肢の中からもっともふさわしいものを選び、その番号をマークしなさい。

1　あなたの強欲を止めることはできない。
2　私一人で考えても、十分な贖罪の手段は浮かばない。
3　神仏のお心を満たすことはできない。
4　私の考えからすると、まだ十分な償いとはいえない。

問6　傍線部F「仕うまつらしめん」に含まれる助動詞の意味の組み合わせとしてふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　推量と完了　　2　使役と意志　　3　推量と適当　　4　使役と推量

問7　傍線部G「くらましける科」の具体的な内容を、「□　　こと」の形で答える場合、空欄に当てはまる適切な記述を、本文中から二十八文字で抜き出し、その最初と最後の三文字を、解答欄に記しなさい。

問8　儒学者の中江藤樹（一六〇八～一六四八）は、教訓書『鑑草』の中で、この話について、以下のように論評している。

されば貪欲の人には、「金銀米銭を欲しし、惜しし」と思へる念々積もり固まりて、心中の癪（腹や胸に激痛を生ずる病）となるを、銭癖（銭を惜しむ気持ちを病気にたとえたもの）と名付く。この癪いで来ぬれば、聖人の教化も入りがたし。才美にはこの癪いまだなかりけるにや、よく金言を信じ、過ちを悔ひ、善に移り、つひに清福を得たり。この故事を見聞く人、才美にほまれを専らにせしむることなかれ。

傍線部における藤樹の主張としてもっともふさわしいものを、次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

1　周才美のように強欲であっては、莫大な利潤を得ることは難しい。
2　悪知恵の働く周才美だけに、多くの利潤を独占させてはならない。
3　改心して富と名声とを獲得した才美を、余人も見習うべきである。
4　妻を家にとどめるために、彼女の諫言に従った才美は立派である。

問9　右の『堪忍記』の一段は、中国の『迪吉録』という書物に基づくものとされているが、そこでは「才美」が夫人の舅の名前になっている。その書き出しは、以下の通りである。

周才美、有二子婦一賢徳能幹一、才美将下以二家政一付上之。

【訳】周才美には、賢くて思いやりのある、きりもり上手な嫁がおり、才美は家事の一切を彼女に委ねようと考えた。

原文の傍線部を、訓点に従って読み下す場合、五番目に読む文字はどれか。次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

1　将　　2　政　　3　付　　4　之

問10　『堪忍記』と同じく仮名草子に分類される作品を、次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

1　『太平記』　　2　『日本永代蔵』　　3　『住吉物語』　　4　『竹斎』